
ラディカルエンジェル

桐生星男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラディカルエンジェル

【Zコード】

Z0410D

【作者名】

桐生星男

【あらすじ】

天使ができます。曖昧で中途半端な状態が好きな男子大学生と、モノゴトを深くズバリと切り込んでしまわずにはいられない可愛い系天使のどたばた青春コメディー。

プロローグ

「大学の門を入つて、まっすぐ行つた広場に、銀色の大きなモニメントがあるでしょ？ 購買部に行く途中の。あのモニメントの腕？ みたいなところが、くねつとなつてて、何かを指差してゐたいになつてるんだけど、その指差してゐる先にね」

女の子の話は、とてもわかりにくい。

この子に限つた事じゃなく、世の中の女の子は大体そうだと思つ。目の前でコーヒー カップのふちをいじりながら一生懸命しゃべつてゐるこの子、井上真奈美とは、大学へ入学した直後に知り合つた。たまたま入つた音楽系のサークルにたまたま彼女も新入生として入つてきた、というごくごくありふれた出会いだ。新入生歓迎コンパで、これもたまたま隣に座つたとき、なんとなくぬるい自己紹介をし合つたことは覚えている。以来、廊下ですれちがえばちょっと立ち話をしたり、たまにはいつやつて喫茶店で暇をつぶしたりするよな仲になつた。

こういう関係をなんと呼ぶのだらつ……。音楽仲間と呼ぶには音楽の話なんて全然しないし、友達と呼べるほどの感情の共有はない。もちろん、恋人同士では全然ない。ただわかり難くてどうでもいい話をする女の子と、それをぼんやりと聞く僕。そう、僕、相原ユウジは、目の前の女の子、井上真奈美のことを、好きでも嫌いでもない。そんな関係。

雨が降つてきたな

静かに音楽の流れる室内から、僕はさらさらと雨の流れ落ちる窓の外を眺めながら思つた。まるで水族館の中にいるようだな。雨粒は窓を叩いて滴になつて落ちた。

……悪くない、と思つ。相手のことをどう思つかなんて、どうでもいいのだ。たぶん僕は、こういう時間をこういう風に過ごすことが、好きなのだ。聞こえるか聞こえないかくらいの音量で静かに流

れる音楽と、うまいともまずいともいえないブレンンドコーヒー、それに彼女、そして降りはじめた雨。田をつぶつて心の中でもうなずいてみる。うん、悪くはない。

「ね、何があると思う」

真奈美が突然話を振ってきた。

「うーん」

僕は十分なメモリを積んだクアッドコア並にスムーズに、スリープ状態から現実へと復帰する……はずだった。

「なんだろうね」

どうでもいい話をする女の子に話をあわせるために必要なのは、理屈ではなく感覚だ。そのへんを押さえておけば適当に答えるても何も問題ない。今までそれでトラブルになつたことはほとんどないし、幸か不幸か僕は生まれつき、インテル入つてる並にそういう皮膚感覚のようなものを持ち合わせているのだ。

いや、生まれつき、というのは間違いかもしれないな。物心がついた頃には、と言つたほうが正しいのか……。

五歳の時、僕が預けられた親戚の家には女の子ばかりがいた。女の子しかいなかつた。十六歳から九歳までの三人の姉と、八歳から一歳までの六人の従姉妹。^{いとこ}幼なじみが一人。全員、女。そして女の姉妹がいる人には分かつてもらえると思うが、身内の女つていうのはアクが強くて扱いにくい。他人の女とは別の生物と思つていい。遠慮を知らないからな、彼女らは。それが合わせて十人もいるのだ。まあ、ある意味、戦場だ。

そんな中で育つたせいか僕は、快適な自分のポジション、つまり必要以上にいじめられたり溺愛されたり懐かれたりすることのない、かといって完全に仲間はずれにされることもない、この『悪くはない』ニッヂを、幼少時代にはすでに獲得していたわけだ。

……だから、身内ではない、普通の女の子である真奈美のどうで

もいい話に、こんな風に突然相槌を求められたとしても、僕としては話を合わせるくらい、訳もないはずだつた。

そのときそれが、窓の外を横切るのを見てしまわなければ……。

見てしまつた僕は、不覚にも、……フリーズした。

人は、二種類の人間に分けられると思う。自分のスペックに收まりきれない出来事に遭遇そうぐうしたとき、フリー^ズする奴と、暴走する奴。僕の統計からいうとその確率は、普段の行動や思考にはほとんど関係なく、ランダムに一分の一だ。それがその人の本質つて奴か？

「どうしたの」「

真奈美はくりつとした目を『?』の形にして、僕の顔をのぞき込んだ。そして僕の視線を追つて窓のほうを……、振り向くよなあ、やつぱり。気になるもんな。…… そういえば真奈美はどっちなんだろ？。僕は真奈美が暴走するタイプじゃないことを祈つた。

「なにあれ……」

振り向いたまま真奈美はそう言つて、……フリーズした。

窓の外には、天使がいた。

体のわりに大きめの翼と口元を半開きにして。

雨の滴が青白い光を窓ガラスに揺らめかせる向こう側に、え、なんで？見つかっちゃつた？とでも言いたげな小さな顔の天使が、大きな目を見開いて、ズブぬれになりながら……フリーズしていた。

第一話 天使の名前

天使がどうやって眠るのか疑問に思つたことはないだろうか。仰向けに眠るのか、うつ伏せに眠るのか、あの大きな翼は折りたたんで眠るのか、それとも取り外して眠るのか。リングは眠るときに眩まぶしくはないのか。そもそも天使は眠るのか。僕らは意外と天使について何も知らない。

天使のイメージも人それぞれ色々あるだろう。男の姿なのか女の姿なのか。赤ん坊なのか成人なのか。服は着ているのか手には何か持つているのか。弓を持っていたり杖を持って拝んでいたり、包み込むような温かさで何かを抱きかかえていたり。……僕にとっての天使のイメージは、成人の女性でいい匂いのするふわふわの白い服を着ていてこう何かを包み込むような感じ、五歳のときに母親を亡くした僕にとっては、天使といえば母親、母親のイメージがすなわち天使のイメージだ。

購買部に行く途中のモニュメントの下のベンチに座つて、次の授業まであいた時間にそんなことを考えながらぼおつ正在中と、真奈美が手を振りながらやつてきた。

「ねえねえ相原君。あの子に名前をつけてあげない？」

と、真奈美は僕の隣に腰かけて言った。この普通の女の子が名前をつけようとしているのは、拾つてきた犬でもネコでもなく、UFOキヤツチャーで取つたぬいぐるみでもない。おそらく昨日つれて帰つたあの美少女天使のことだらう。……そう、つれて帰つてしまつたのだ。

「みくチャンなんてどうかな？」

真奈美はくりつとした目を少し伏せがちにして僕を見ている。……みくチャンねえ。天使に名前をつけるという発想はなにげに斬新で良かつたんだけど、みくチャンはなくないかな？ まみみん。サー

クル棟一階北側のコンピュータミュージック研究会の部室から四六時中聞こえてくるみづくみくんなあの曲に洗脳されてはいないかい？ちなみに我等が邦樂研究会は三階西側にあって、そこへ行くには北側の階段を使うのが近道になる。つまり、みづくみくんなあの曲が強制的に聞こえてくるわけだ。

「みくチャンがだめなら、みくるチャンは？」

それはあれだろ、真奈美さん。サークル棟一階のアーニ研から聞こえてくる、みんなみらくるみくるんるん、だろ？わかる。確かにあれはちょっとうつとおしいよな。だけど……素ですか？真奈美さん……。

「普通にありきたりなのでいいんじゃないかな」

名前なんてそもそも記号なんだから、わかる人にわかれればいいのだ。毎回毎回あの時喫茶店の窓から見た天使とか拾つてきた天使とかいうのも一々うつとおしいし、なるべくなら短い名前のほうが多い。あれが僕たち以外の人にも見えるのかどうかはわからないが、今のところ基本的には僕と真奈美の間でだけ通じればいいことなのだ。とにかく今は名前なんかよりも善後策を考えなければ。

「ポチとか」

「それいいかも」

「よくない！」

叫びながらバサリと音を立てて、天使が降りてきた。一体どこにいたんだ？……ていうか普通に日本語しゃべれるんだな。金髪だから外人だと思っていた。

「最悪なネーミングセンスね。ていうか私にも、名前、あるから」

「あらあポチちゃん、もう寝てなくて大丈夫なの？」

普通に本気で怒っている。

僕は目の前に立つ天使をまじまじと見つめた。背格好は中学生くらいか。コスプレのような白いひらひらのミニスカートからすらりと伸びる白くてきめの細かいふとももがまぶしい。両腕は腰に回し、怒っているんですけど全身で表現するかのように反り返っている。華奢な肩の上に乗つかった首は細く、完璧な顎のラインと切れ長の目はまるで天使のようにかわいらしい。そして肩の下まで伸びる艶やかな金色の髪は左右をツインテールに結わえてある。

僕たち三人はしばらくなんともいえない意味不明な沈黙の中にいたが、

「『めんなさい』

と、真奈美が言つと、天使は少し表情を和らげた。

「あなたたち、私を何だと思つてるの？」

天使だろ？ 怒った顔をしていても見ているとつい微笑んでしまうような究極のバランスが保たれた美しさ、まさしく天使だ、と僕は思つた。

「真奈美ちゃん」

「そ、それって本物ですか？」

真奈美は天使の頭の輪つかを指して恐る恐るたずねた。天使はおもむろに頭上のリングを一つに分けると、

「これ？もちろん本物。結構便利なよ。真奈美ちゃんにも一つあげるわ。ブレスレットにでもしなさい。ほらこいつすると、輪つかが小さくなつたり大きくなつたりするでしょ。それからあなた。あなたにも特別にあげるから、首輪にでもしてなさい」

「と、思つたけどやつぱりやめるわ。返して。おもちゃじゃないんだから軽はずみにあげちゃだめよね。それに、人間に干渉しそぎるのもよくないし。代わりに祝福をあげる」

天使はふわりと近寄ると、白くてやわらかい腕で僕を包み込んだ。

暖かい感触。

「あなたの孤独が癒されますよ」

天使は真奈美にも同じよう

「あなたの願いが叶いますよ」

と、抱き包んだ。

「光が見えたなら、あなたたちは私のことを忘れます。じゃあね、お

幸せに」

天使の背後から、まばゆい光があふれ出し、大きな光の玉となつて上空へ駆け上つた。

僕たちはそれきり天使のことを忘れた。

僕と真奈美は、たまに音楽の話をするようになった。話をしてみると、意外と面白い子だった。相変わらずなんとなく過ぐす毎日だったが、少しずつ何かが変わっていくような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0410d/>

ラディカルエンジェル

2010年10月10日05時39分発行